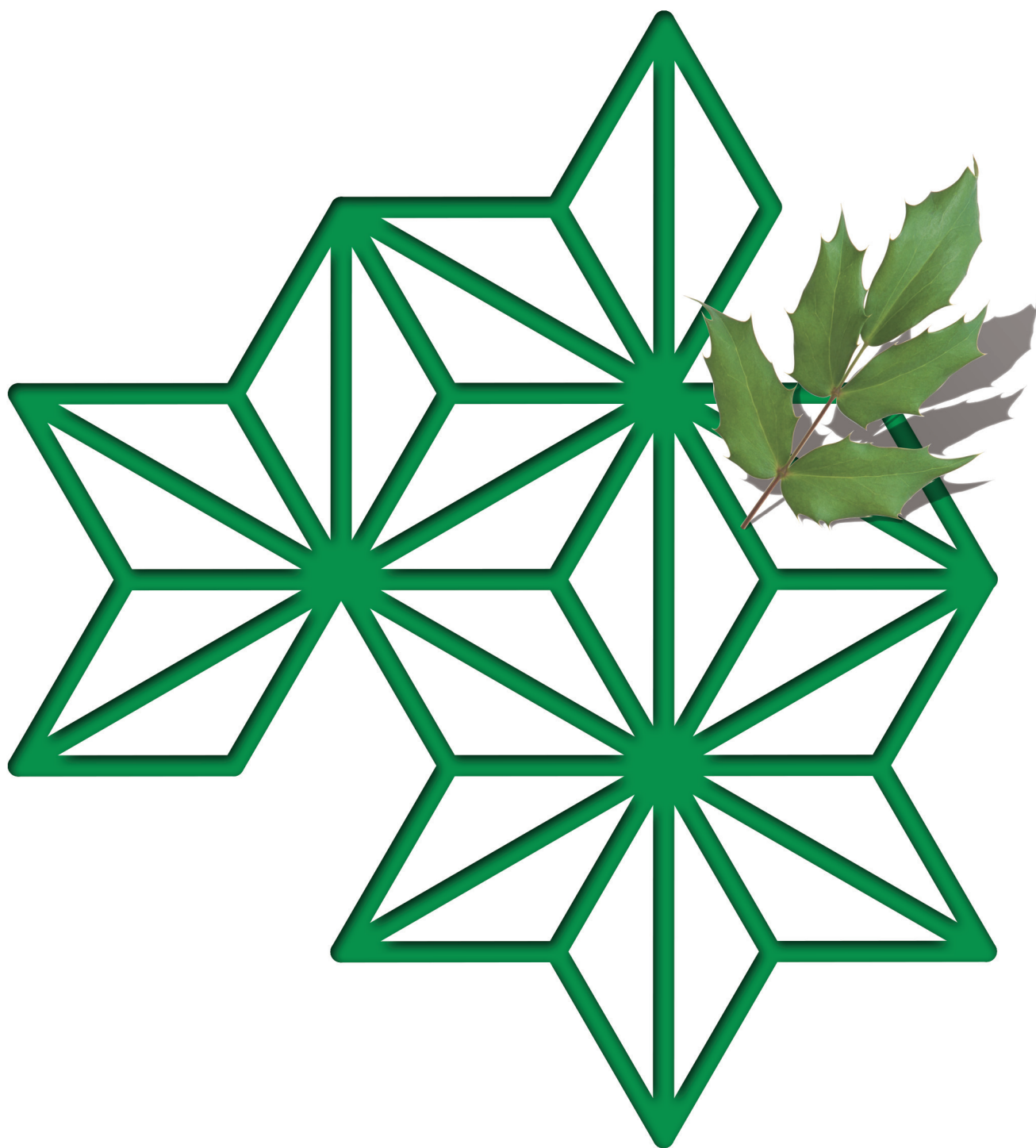




祝

2017年3月 東京農工大学・早稲田大学 共同研究博士号(生命科学)取得

安藤 泉さん(取得時61歳)

【論文テーマ】イヌにおける様々な外因性ストレスの評価指標に関する研究

自分ができそうなことは次々とやりたくなくて、大好きから博士に

■アイメイト(盲導犬)との出会い

アイメイト候補犬のマリカちゃんを伴って財団を訪れた安藤さん。アイメイトの飼育ボランティアを始めたのは1995年で、現在のマリカちゃんはもう16頭目になる。きっかけは夫の海外赴任によりアメリカで暮らしたとき、街のパン屋で盲導犬の子犬に出会い感動するとともに、「ボランティアが飼育犬と1年限定の充実した濃い日々を送っている」という記事を読んだこと。日本に戻った数年後、仕事と両立できるか不安はあったが、思い切ってアイメイト協会の飼育ボランティアに応募した。

安藤さんは当時、大手食品メーカーで商品開発などを担当していた。2年間仕事と飼育ボランティアを並行した後、ボランティアに専念。仕事で培ったスキルも生かしながら、飼育だけでなくイベントやチャリティグッズを企画するなど、ボランティアなら深く関わっている。その一つアイメイトカレンダーは、ボランティアたちから飼育犬の写真を募集、当初50部から始めて現在は7000部を販売し、育成資金の一部を担っている。

■学び直しをきっかけに東大のゼミに

楽しく充実したアイメイトボランティアをしていた安藤さんが、なぜ博士号を目指したのか。

「元々じつとしていられない性格で、夫について行ったアメリカでも、マーケティングを勉強したり、ボランティアでパーキンソン病財団の日本人向け広報をしたりしていました。アイメイトでも、企画でも何でも、自分ができそうなことは次々とやりたく

なるんです。博士号も最初は全然そんな気はなくて、文科省の〈学び直しプロジェクト〉があったとき、母校はどうなっているかくらい軽い気持ちで、東京農工大学の獣医学部の講座を受けたのです。盲導犬の勉強をしたいと言ったら、農工大にはないけど東大には研究している先生がいるよと紹介を受け、現在も継続している盲導犬のゼミに聴講生として参加しました。盲導犬を育てて感じることもあり、自分なりの研究をして論文にしたいと言ったら、事例がないからぜひうちでと誘われ、2012年に農工大の大学院に社会人入学しました」

■盲導犬のストレスを可視化

最初は犬のアトピーを研究したが、財団の博士号取得支援事業に応募するも不合格だった。その後、盲導犬のストレスを検証するため、新たなストレス



国立の東京農工大と私立の早稲田大との共同研究学位はめずらしいケース。両方の図書館が使えるのがうれしい。

マーカーの可能性がある血清中のマグネシウムとNGF(神経成長因子)に着目。従来のマーカーであるコルチゾールでは見分けられなかった、与えるストレスの種類や盲導犬の訓練レベルの違いによる反応の、有意な差を計測することに成功したのだ。マグネシウムは主に環境的ストレスに反応し、NGFは精神的ストレスに反応することが見えてきた。

測定結果には訓練士の実感と重なる部分もあった。訓練をやり始めた直後にうつ様状態になる犬がかなりいるが、数か月すると急に明るくなるのだという。訓練初期の犬はマグネシウム、NGFともに低い、訓練後期の犬はどちらも高く、ストレスを受けにくい状態であることを示していた。

■あきらめなければ趣味からでも博士に

今後は、犬の状態と飼い主の判断のギャップを埋め、犬ごとに訓練の進捗を調整するなど、アイメイト育成への還元はもちろん、言葉を交わしにくい乳児や心身患者の、身体の状態を測る方法などにも発展させられるのではと期待している。

「思うような測定結果が出ないときや、論文に査読がつかなくて進まないときなど、『明日電話して、もうやめると言ったら楽になるな』と思ったことが何度かあります。そんなときは親子ほど年の差のある同期生と励まし合いました。学位論文仕上げ時に1か月ほど家事を放棄して迷惑をかけた夫に、『あきらめないとこはすこいよね』と感心されましたが、あきらめなければ、趣味からでも博士になるチャンスがあるのです。皆さんがんばってください!」

まるで恋をしているように、ドキドキしながら仕上げ



乾漆螺鈿蒔絵稜花箱
「カメレオン」
(2014年)



漆芸^{らでん}(螺鈿)

中條伊穂理

Nakajo Iori

1966年 神奈川県に生まれる
1992年 石川県立輪島漆芸技術研修所専修科卒業
1993年 第10回日本伝統漆芸展初入選 以後21回入選
1995年 石川県立輪島漆芸技術研修所蒔絵科卒業
1996年 重要無形文化財(螺鈿)保持者北村昭斎氏に師事(～1999年)
2000年 第17回日本伝統漆芸展 朝日新聞社賞
第47回日本伝統工芸展初入選 以後12回入選
2007年 第47回伝統工芸新作展(現 東日本伝統工芸展)初入選 以後9回入選
2010年 第28回日本伝統漆芸展 輪島漆芸美術館賞
2011年 第29回日本伝統漆芸展 朝日新聞社賞
2012年 第52回東日本伝統工芸展 日本工芸会東日本支部賞
2016年 第33回日本伝統漆芸展 輪島漆芸美術館賞
2017年 築地久弥・中條伊穂理 漆芸展「漆を纏い 螺鈿が煌めく」

美しく虹色に輝く螺鈿。貝殻の内側の真珠層から切り出した板状の素材を、漆地や木地の彫り出された表面に嵌め込む。螺は貝、鈿はちりばめることを意味する。日本には奈良時代に、遣唐使が中国から持ち帰ったと言われ、東大寺正倉院の宝物には螺鈿紫檀五弦琵琶など、精巧な螺鈿を施されたものが多数現存する。平安時代に入ると日本人の技術も向上し、蒔絵との併用で、室内調度の品、他、建築装飾にも応用されていった。

——漆芸・螺鈿に興味を持ったきっかけは何ですか。

小学校の卒業文集に、意味が分かっていったのかは思い出せないのですが、「十年後は工芸作家になっている」と書いています。小さい頃から生き物が大好きで、毎日虫や魚を追っ掛けているような子供でした。作品に動植物が多いのはその影響です。

実際に漆芸に決めたのは、芸大受験中に、音丸耕堂先生と松田権六先生の回顧展を観て、「漆っていいなあ」と思ったからです。結局芸大には行けず、輪島漆芸技術研修所に行くことになりましたが、4年足踏みをした反動もあり、漆の授業は楽しくて楽しくて。顔や体がひどくかぶれても平気なくらい楽しかったです。研修所で6年間学び、95年に蒔絵科を卒業、文化庁芸術家国内研修員に選ばれたのを機に、奈良の北村昭斎先生に師事しました。螺鈿はそれからです。先生は、重要無形文化財(螺鈿)保持者で、春日大社や正倉院の宝物などの修復もされています。

——中條さんの作品にも正倉院の流れを感じます。そうですね。初めは正倉院の宝物を古臭いと思っています

たのですが、「これを作った当時の人が、日常生活の中で見ていたそのままを描いているんだ。今私が見ている世界と同じなんだ」と、ストーンと心にはまった時から、宝物の鳥や動物が生き生きと鳴いたり走り始めたのです。それから「私もこんな作品を造りたい」と思いました。いざ造ろうとすると画力も技術もまだまだで、悔しいばかりですが。

——ユニークなモチーフの源泉は何ですか。

身近な好きなもの、たとえば「ロンド」のモチーフは、足の曲ったヒナ鳥のピーちゃんです。うちには5か月しかいませんでしたが、心を通わせ合った幸せな時間を形にしました。制作中は、ずっとピーちゃんと会う事ができますから。「遊」は、子供の頃に川の中をのぞいて「いた!!」と、手にした網をギュッと握り直す時のワクワクした私の気持ちを形にしたものです。薔薇は正倉院の五弦琵琶に描かれている、私のあこがれのモチーフ。私の中にも取り入れたくて、庭で育てて毎日見えています。

自然の中だけでなく、いろいろなものを見て、感じる機会も増やしています。「フランク人人間国宝展」や山梨県のアフリカアートミュージアムにも行って、鑑賞しました。「チワラ」や「カメレオン」はアフリカアートがヒントです。伝統工芸ではないのと言われることもあります。

——螺鈿の材料や制作工程を教えてください。

貝は、アワビ、夜光貝、白蝶貝、アコヤ貝など。生産地によって色合いや雰囲気異なります。厚貝は貝を研磨して切り出すもので厚さ1〜2mm、乳白色に真珠様の輝きが特長です。薄貝は0.2mm程度、青やピンクの鮮やかな輝きが特長です。私の作品は主に厚貝を用いますが、葉っぱなどの細かなもので、下絵を厚貝の使いた

乾漆螺鈿花鳥文漆箱「ロンド」
(2016年)



螺鈿花鳥文小箱
(2016年)



螺鈿盤「チワラ」
(2015年)



乾漆螺鈿蒔絵箱「遊」
(2014年)



い場所に貼って、一片一片糸ノコで切り出します。

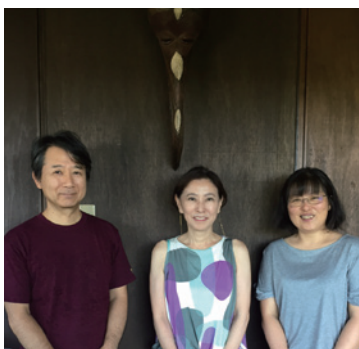
器の表面が平面の場合は、貝を貼りその厚み分、漆と地の粉を混ぜたもので埋めます。曲面の場合は、漆の表面を絵柄と同じ形に彫り込んでから貝片を嵌め込みます。どちらも、塗りと研ぎを何度も繰り返します。

——中條さんの思いが作品から伝わってきますね。

若いころはカッコイイものを作りたいと力んだり、あと一歩で完成という時に緊張したりして、その硬さが作品に現れていましたが、最近は失敗をあまり怖がらず、伸びやかさを大事にしています。

生き物をモチーフにした時は、仕上げの段階で、恋をしているように、早くでき上がった作品に会いたくてドキドキワクワクしてしまいます。感情が昂って涙が出ることもあります。思いを込めると、不思議とその熱は伝わってきますね。

この春、漆芸展を共催した夫の築地久弥さんは、曲面を活かした造形と塗りや蒔絵が得意分野。いくつか共同制作の作品もやってみたいという。



聞き手:上野由美子(中央)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年〜2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。



第15回 銀粘土でつくるシルバーアクセサリーコンテスト2017

生涯学習開発財団奨励賞を授与【後援イベント】



↑東京芸術劇場で作品展

↓表彰式で23の賞を表彰



相田征一会長のごあいさつ



後列は審査員各位

粘土のように造形でき、焼き上げると純銀に変わる不思議な素材、アートクレイシルバー（銀粘土）。隔年で開催している「第15回 銀粘土でつくるシルバーアクセサリーコンテスト」の作品展が、10月4日（8日、東京芸術劇場にて開催され、会期中

の10月6日には、池袋のリビエラ東京にて表彰式が行われた。
財団協賛会員の（株）オールアバウトライフワークスが協力し、アートクレイ倶楽部が主催、名誉会長である橋本聖子参議院議員もプレゼンターを務めた。財団は後援し、事業部長の佐藤梨奈が理事長代理として、生涯学習開発財団奨励賞を授与した。
今回は日本以外に世界18か国から324点の応募があった。3開催ぶりの日本人グランプリ受賞者となったのは宮城県の松倉映子さん。準グランプリは、ハンガリーのマルタ・エドックスさんと、愛知県の近藤依子さんだった。



文部科学大臣賞

【グランプリ】

『水の流れ』
アクセサリー部門
自由課題

松倉映子さん
(宮城県)



水の美しさと透明感を表現。多数の小穴は流れの表現とともに軽量化の工夫でもある。



生涯学習開発財団奨励賞

【準グランプリ】

『My Favourite Dream』
アクセサリー部門
自由課題

Marta Edocsさん
(ハンガリー)



子供の頃、緑の木々の中で家族とブランコをした幸せな時間をアクセサリーに。



アートクレイ倶楽部会長賞

【準グランプリ】

『墨 象』
フレーミング部門
テーマ課題(Power)

近藤依子さん
(愛知県)



銀盤に布や卵の殻を貼り付けるなどして、多様な墨の表情とパワーを浮かび上がらせた。